《書評》

稲葉宏雄編『教育方法学の再構築』

（あゆみ出版，1995年3月刊，404頁，5000円）

山　崎　雄　介

本書は，稲葉宏雄・京都大学教育学部教授（現・名誉教授，近畿大学教授）の停年退官（1995年3月）を記念して編まれたものであり，教授の着任後に学部および大学院教育課程講座で指導をうけ，現在各地で研究・教育に携わっている16氏が教授自身と共に論稿を寄せている。目次は以下の通りである（以下，敬称略。各論稿の副題も略）。

◇第一部　カリキュラム編成の基本問題（第一章～第六章）

国民学校教育課程論序説（稲葉宏雄），現代カリキュラムと教育評価の問題（金丸晃二），ＯＢＥの現状と課題（田中耕治），学校知としての教科を見なおす視点（鋒山泰弘），小学校低学年教育課程の構成原理（佐藤年明），カリキュラムにおける「自治」と「自己」（河原尚武）。

◇第二部　教育方法の基本問題（第七章～第十一章）

「学力」と「人格」の結節点（柏木正），教育的制約論の試み（松下佳代），明治後期～大正初期における個性教育論の諸相（山根俊喜），知の解釈学と伝達観・学習観の転換（松下良平），学習主体形成と自己評価能力の発達（米田英一）。

◇第三部　各教科・領域での展開（第十二章～第十七章）

国語教育における「子どもの発見」（伊藤隆司），探究の社会科の目標－評価論の検討（岸本実），成城小学校における体育の改造（木原成一郎），高等小学校「家事教科書」研究序説（横山悦生），保育目標の社会的性格に関する一考察（渡辺保博），幼児教育における援助のあり方（鈴木政勝）。

周知の通り，還暦，停（定）年退官などを機に編まれる「記念論集」の類をめぐっては賛否両論ある。うち，「否定側」の内容面でのもっとも強力な論拠は，「概してまとまりを欠く，一書にまとめる必然性がない」とでもいったものであろう。

とはいえ，本書は，基本的に執筆者の現在の研究テーマを反映した形で書かれているため，一書としてのまとまりのなさと引き換えに，教育課程講座のある期間におけるパフォーマンスを反映することには成功している。そこで以下では，執筆には加わらなかった門下生の１人として，上の観点 ── ある意味では，流行の「大学評価」ともなろうか ── から若干のコメントを付すことにする。紙幅および評者の力量の関係で，各論稿への立ち入った評価まではできないことをお

詫びしておきたい。

現在，教育課程講座の対象領域は，あらゆる教育階梯における教育の内容・方法（ただし障害児教育および生活指導は同講座と共に学部での教育単位である「Bコース」をなす教育指導講座が主に扱う）である。実際，本書においても，幼児教育（鈴木，渡辺）から大学教育（米田）に至る教育階梯が射程に入っている。また，教育内容・方法へのアプローチの仕方をみても，外国研究（金丸，田中，鋒山，岸本），歴史研究（稲葉，山根，伊藤，木原，横山），思想研究（柏木，松下良），現代日本の実践課題への直接的論究（佐藤，河原，松下佳）と多様である（もちろん，論者と領域・アプローチとは必ずしも1対1対応ではないので，ここでの分類には少々無理はある）。

しかしながら，評者が伝え聞くところでは，稲葉着任以前の教育課程講座では，前任者以来のデューイ研究の伝統が根強かったという。したがって，上でみた研究領域・方法の広がりが実質的に形づくられてきたのが，稲葉が講座主任であった23年間（1972〜95）であったということになる。

評者自身の被指導体験も踏まえ，もう少し子細にみるならば，指導者としての稲葉は，卒業論文・修士論文レベルまでは「教育実践からの禁欲」を説き，語学力，テクストの綿密な読みなど「基礎体力」をつけることに重点を置いていた。そして，博士課程以降，各人が問題を設定しての論究には，「別の可能性を開示する異他的な〈他者〉」（本書p.231，松下良平論文）として対峙していたことが想い出される。したがって，本書所収の各論稿の完成度は，もちろん第一義的には執筆者の自己責任ではあるが，それと共に，上記のような教育方法の成否をはかる試金石ともなろう。この点の評価は読者各位にお任せしたい。

何やら講座紹介めいてしまったが，最後に「書評」らしく，本書が提起している問題を2点ばかり指摘しておきたい。

本書全体を通覧すると，学校教育の主要な役割（の少なくとも1つ）が「知育」であるという点は執筆者間でゆるやかに合意されつつ，しかしその「知育」の拠って立つパラダイムには無視できない相違がある。具体的には，戦後教育，なかんずく稲葉らが中心になって進めてきた「到達度評価」の理論・実践の中心をなす「学力保障」というパラダイム（田中，柏木）と，プラグマティズム・進歩主義（の再評価）や認知科学（とくに状況論的アプローチ）の流れを汲む「学習（観）の転換」（金丸，松下佳，松下良）というパラダイムである。これら両者の対話・架橋をいかに行うかという課題は，各執筆者のものであると共に，読者としても各論稿の問題意識を引き取って考えるに足るところであろう（鋒山論文はその端緒として読み得ると思われる）。

そして，上の両パラダイムの「対立」の根底をなす，「今後の社会を構想していく上で，『近代』という時代をどう総括するか」という問いとの関連で，稲葉論文が国民学校を対象に選んでいる

ことは示唆的である。周知のように，第2次大戦を戦った両陣営の社会体制については，従来「民主主義対ファシズム」という相違に重点を置いて語られてきたが，近年，「近代化の完成としての『総力戦体制』」という共通点に注目した分析が社会科学の各分野で精力的に行われている。本書での稲葉の論究は，国民学校期の教育イデオローグの論の考察に重点が置かれ，「自らの直接的な体験を踏まえての内在的考察」(p.18) は必ずしも十分に展開されてはいないが，今後の研究の進展において，上記のような社会体制研究と相俟って，総力戦体制期の教育の実像をより立体的に明らかにすることが期待される。

(光華女子短期大学)